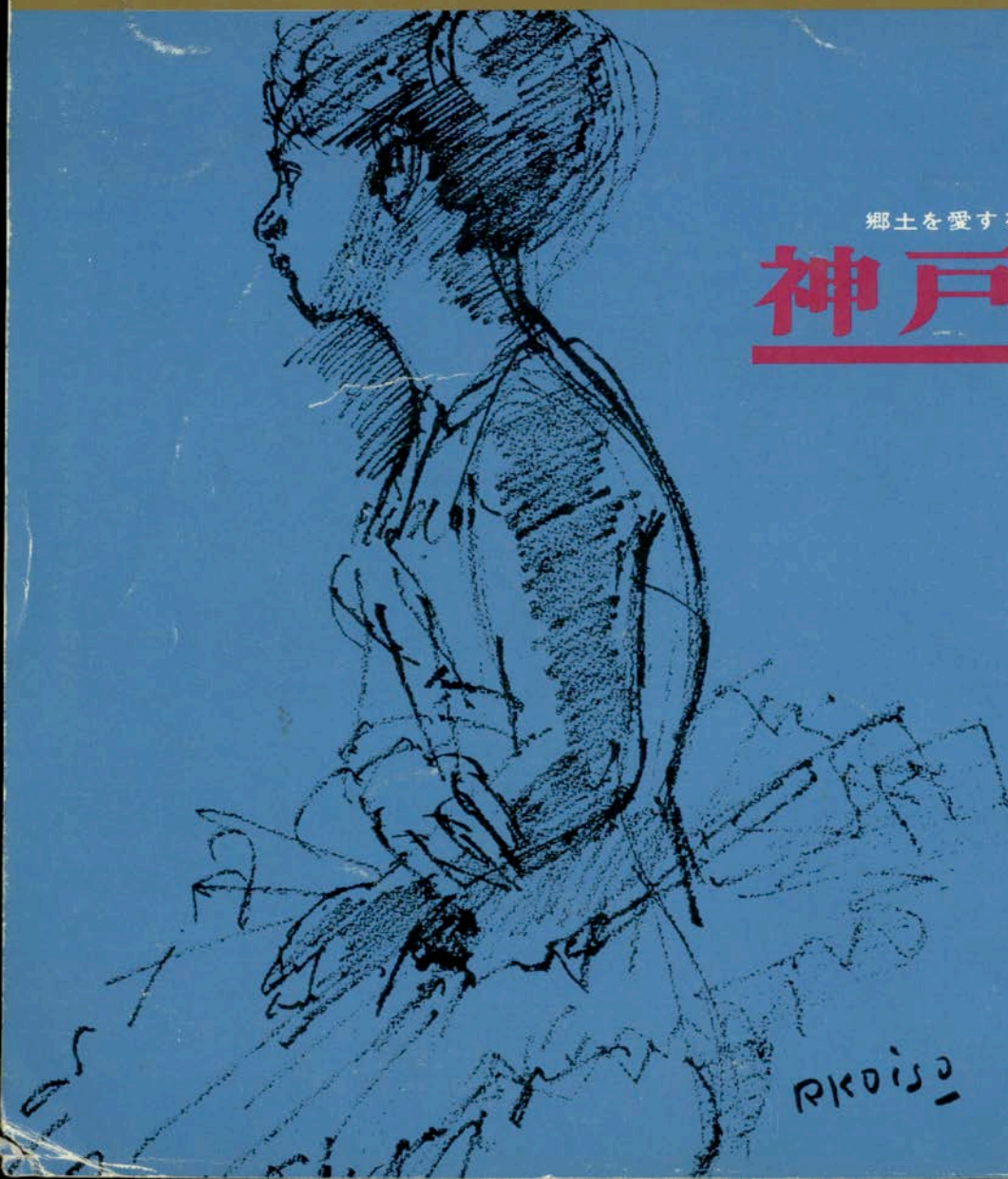


magazine kobekko july 1967 no. 75

7

郷土を愛する人々の雑誌

神戸っ子



RKOISO

神戸っ子 昭和四十二年七月一日第三種郵便物認可 昭和四十二年七月一日印刷 通巻七十五号 昭和四十二年七月一日発行 毎月一回

ますます

スポーティになる装いに

ペンダントは欠かせない

おしゃれのポイント

あなたの胸もとに

清らかな輝きを

強調してください。

若さを

表現してください

あなたはきっと

ヒロインです

御木本真珠店

神戸＝三ノ宮－神戸国際会館

TEL. 22-0062

大阪支店＝堂島－新大ビル

TEL. 363-0247

京都＝ミキモトパール京都(新門前通り)

TEL. 54-8171

都ホテル・京都ホテル・京都国際ホテル

大阪＝阪神・高島屋・松坂屋

●本店＝東京－銀座四丁目

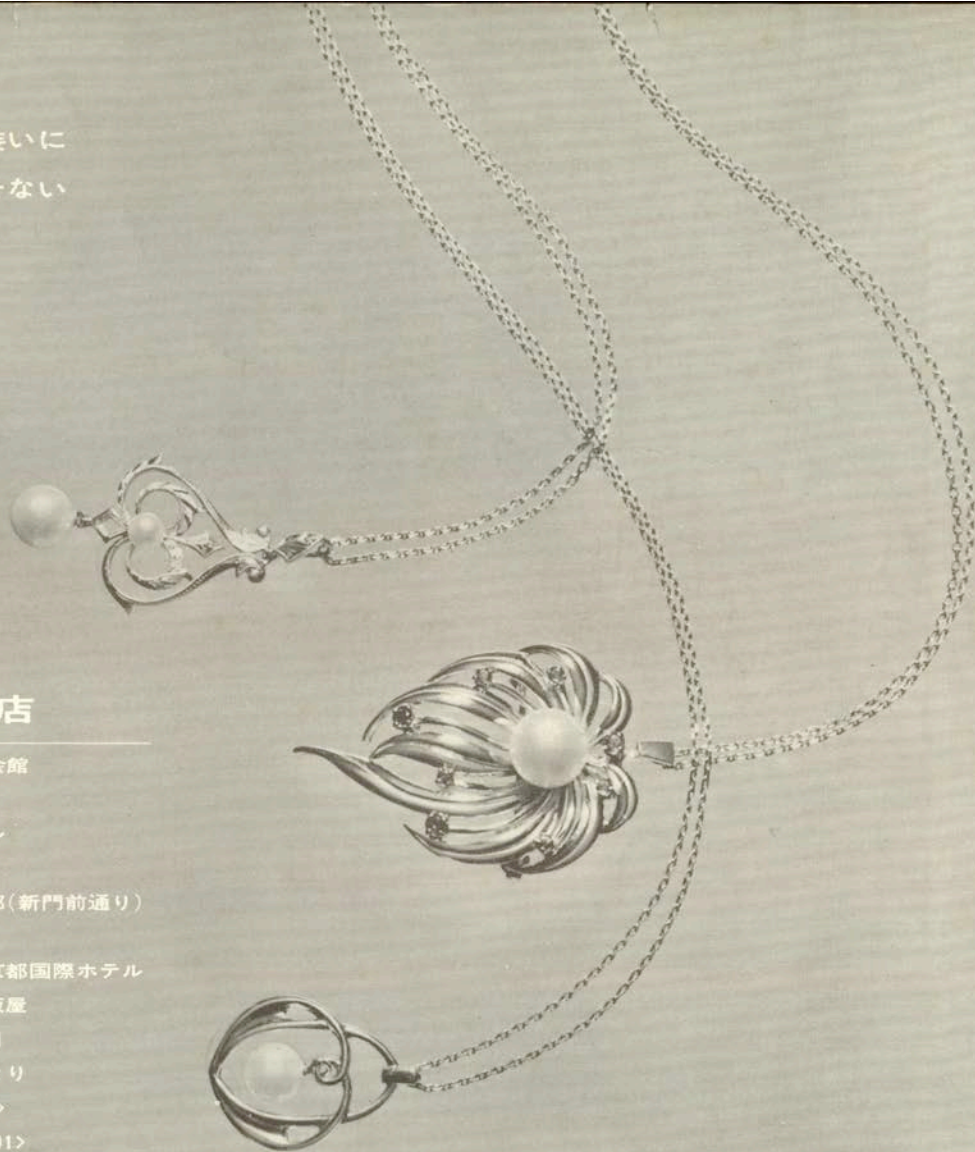
●写真のペンダント 上より

WG製 ¥15,000<PP-88>

WG製 ¥90,000<PP-3101>

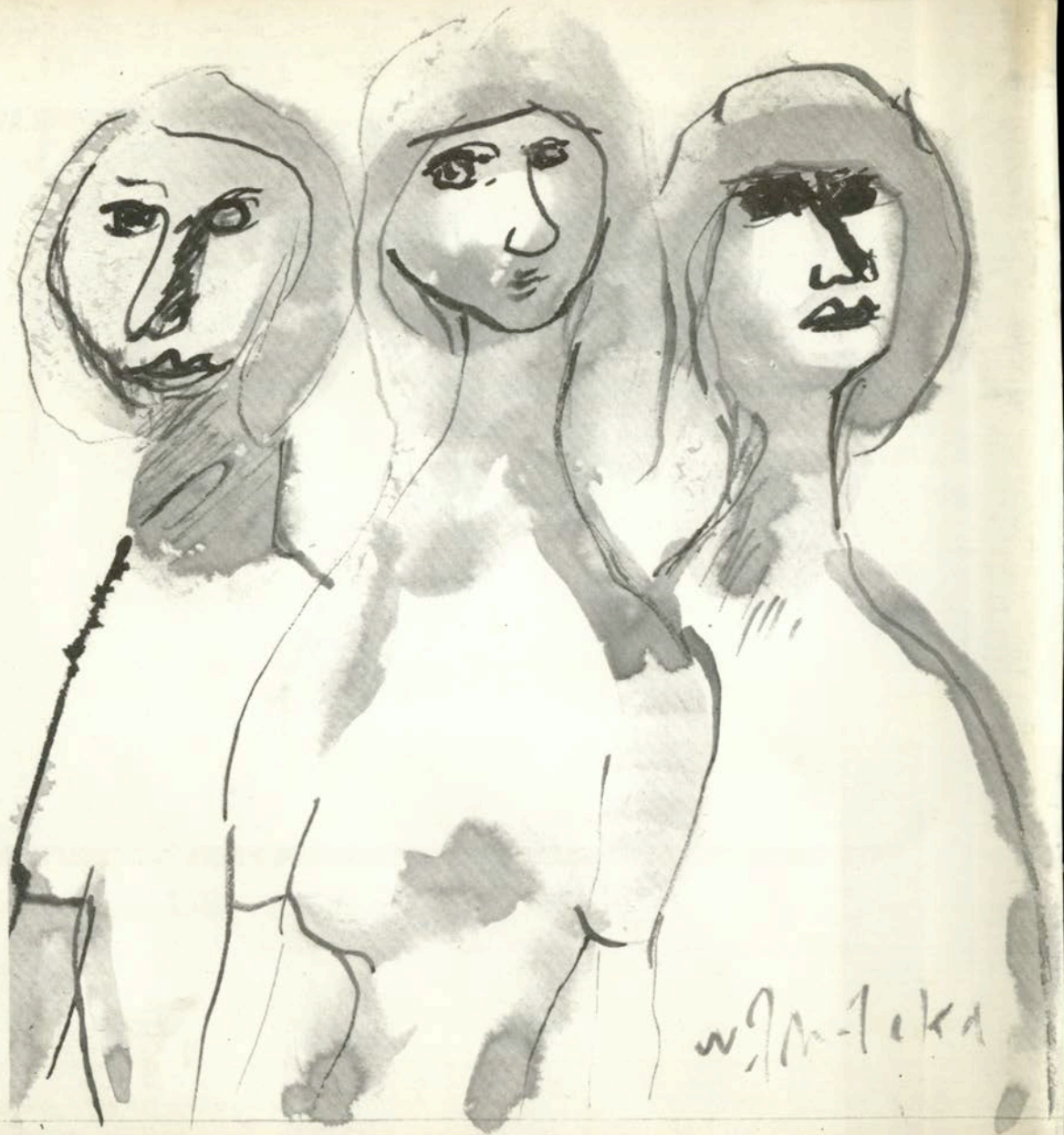
K14製 ¥10,000<PP-164>

© 1967-7



眼

みつめられるとハッとする。
なにからななまでみとおしのような眼だった。
そんな眼がいま通り過ぎた。
群衆のなかのパントマイム。



絵・詩——津高和一

wj m-1 cka

神戸・三宮の中心に豪華プールが誕生..

* 6月10日にオープンしました!



● 25 mの競泳プール・30 mのファミリープール
40 mの噴水スライダーの設備があります。

三宮スイミングプール 興南開発株式会社

社長・南 史郎

国鉄三宮駅南300m 三宮ボーリング東隣 TEL ㉔ 8059・4627

★営業時間〈9.00AM~9.00PM〉

●神戸の中心にデラックスレジャープールが完成しました。40mのすべり台と極彩色の水中ランプの美しい夜間照明はリゾートの夏をたっぷり楽しめます。1日6ターン〈ろ過機による浄化回数〉で最高の浄化装置、シャワーは温水、冷水が使出可能、近代ロッカーの完全管理など安心して、ご使用いただけます。

料金表

6月11日～7月8日	平日	大人 700円	学生 650円	小人 450円
	土・日	平日料金が50円アップします		
7月9日～8月27日	平日	大人 750円	学生 700円	小人 500円
	土・日	平日料金が50円アップします		

〈この期間中は営業時間をAM9.00~PM10.00 1時間延長〉

ズームアップ

上月倫子へ上月倫子バレエ研究所主宰へ

カメラ・浜岡 収

13

「日本のバレエを創りたい」と、クラシック・バレエに意欲をもやす上月倫子さん(25)は、普段は、なにげない優しい小柄なお嬢さんである。ところが、舞台上立つ彼女は、俄然、生彩を放つ。リズムにのって踊るのが楽しくて仕方がないという風だ。上月さんが、この道に入ったのは十歳の時。誰からすすめられたのでもない。とにかく好きで、当時、西宮にあった谷桃子バレエ団関西研究所のレッスンに通った。松蔭女子短大を卒業後、東京本部に移り、三年間、団員として活躍。これまでのレパトリーは、「くるみ割り人形」の金平糖の女王、「白鳥の湖」の黒鳥、「レ・シルフィード」の主役、「ジゼル」「リゼット」のソリストなど。

現在は、神戸で、自分自身の勉強を続けながら、後輩の指導にあたっている。今秋、第二回発表会をもつ。今一番やりたいのは「生田川」の創作。生き生きとした表情で、抱負を語る上月さん。自ら選んだ道を、「果てしなく大きな夢」を抱きつつ、どこまでも歩み続けることだろう。

へ六甲森林植物園長谷池にて



確信をもって
タジマの目を選んだ
世界の宝石の名品

Tajima
*** 宝石店 **タジマ**

元町2丁目〈山側〉TEL ③③ 0387・2552

タジマの特典／当店で買ったダイヤ指輪は
販売価格で引き取り交換をお約束しております

□ P M エメラルドダイヤモンドペンダント 左エメラルド16重入りダイヤも入れり フローリッシュ専用 右エメラルド12重入りダイヤも入れり



ズームアップ

坂下茂己 〈神戸縦ノ木学園々長〉

カメラ・浜岡 収

14

「まあ、お相撲ごっこだ」「園長先生なんか、おっかなくないぞ」「それ、ガンバレノ」元氣いっぱいぶつかったいく子供達。緑の自然に囲まれた小高い丘の上にある精神薄弱児施設「縦ノ木学園」での一風景。ここには、児童福祉法第42条に基き、18才未満の児童、約60名が収容されている。

園長の坂下茂己氏は、昭和三年、三宮の生まれ。各地の施設を修業して廻っているうちに、施設造りを決意。ゼノ神父のよき指導を得て、昭和40年6月に開園。今年で二周年を迎えた。これまでは、冷たい批難や妨害もいろいろあったが、どうか「理解」へ。「やりたいことをやり通すのが神戸っ子だ」と、目標に向かって荒武者のように邁進する坂下氏の情熱と行動力。だが、単なる同情や使命感だけで続けられるものではない。坂下氏には、それにプラスして、生産活動の中から少しでも豊かならう。という、いい意味の、欲張り精神。がある。アトリエ・ポンプ小舎」での陶器作り、梅林やコンフリーの栽培など、新しい実験や計画をどしどし推し進めていく。将来、新しい村づくり。コロニー建設の夢もあると語る坂下氏の活躍が期待される。

〈垂水区神出町にある縦ノ木学園にて〉



TASAKI PEARLS



夏の海に光るタサキパール
美しさと優しさを秘めて

田崎真珠

本 社・神戸市灘合区旗塚通 6-9
三 宮 店・神戸新聞会館秀品店内
銀 座 店・東京都中央区銀座西 6-5
パールファーム・溜池電停前(ショールーム)
ヒルトン 店・東京ヒルトンホテル内
オータニ 店・ホテル・ニューオータニ内
札 幌 店・札幌パークホテル内



あなたの真珠はパール・マークのお店で
日本真珠小売店協会加盟店

ある集い
→ K O B E ←
Y.M.C.A. ヨットクラブ



海のうえをすべる白い帆。
海上に咲く白い花。夏の風物詩、ヨットの姿はみるからにさわやかである。ヨットのシーズンには夏だけのものと思われがちだが3月から11月末まで、艇の整備期間などを入れると年中楽しめるスポーツだといえる。


海は静かな日ばかりではない。二度と同じところは走らないし、あらゆる気象条件、潮の流れなどの確に状態を判断、チームワークを養い、孤独に耐える忍耐力を創りあげなければならぬ。ヨット乗りはヨットに乗って苦しいという。しかし苦しくても乗りたい。自然を征服する喜びが楽しみとなり、人格の形成に役立つからだ。神戸YMCAヨットクラブも会員約60名年々その数も増えてきている。

写真は前列左から

角町郁男(学生・神大) 天野利昭(川越商事勤務) 後藤智津子(日本生命勤務) 片岡巧(エステイプエージェンシ勤務) 山本睦(無職)

後列左から

石野成之(新明和工業勤務) 大橋喜美(無職) 宮下泰彦(学生・関学) 大饗知之(学生・関学) 多留浩雄(自営) 鍵政統一(神戸市役所勤務) 与田耕治(自営) 西宮ヨットハーバー神戸YMCA 艇庫前で写す

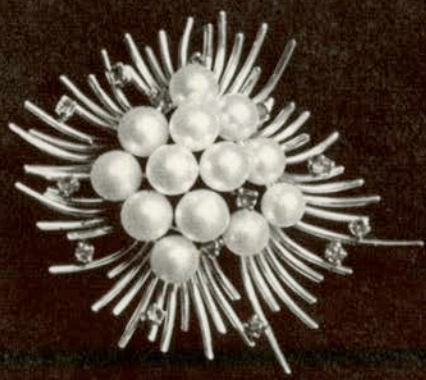
Murata  **ムラタ**

村田*真珠/銀座山岡*毛皮/船乗婦人服飾

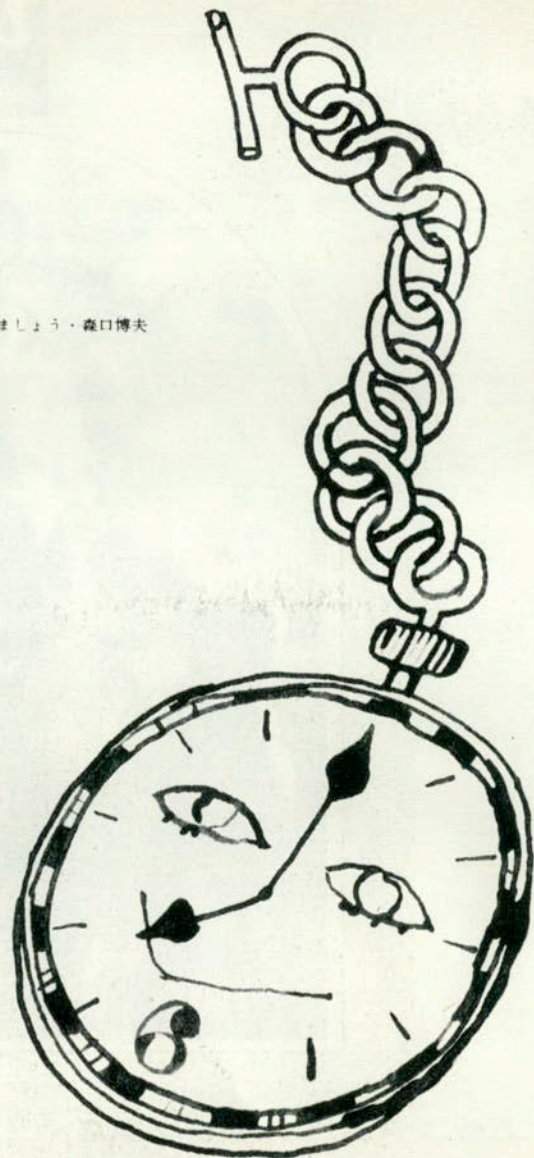
さんちが*レディスタウン・TEL.39-3886-7

バリカラーのプレタポルテであなたの夏を楽しく!

ルビー入りW.G. 台パールブローチ ¥77,000



■白と紺のコントラストが美しいリネンタッチのサマーワンピース。
 バンタロンスーツにもなります(フランス製 ¥21,000)



表紙——小磯良平

1——Second Cover／津高一

3——ズーム・アップ／撮影＝浜岡収

⑬上月倫子 ⑭坂下茂己

7——ある集い／神戸Y.M.C.A.ヨットクラブ

11——わたしの意見／金井元彦

13——随想／水口ニガイ神戸の郷愁・原 清

随想／食べること・茂木章介

随想／……のある風景・中西武夫

随想／戦前の神戸・白井鉄造

23——ある集い——その足あと／神戸Y.M.C.A.ヨットクラブ

24——随想二題／日本人の眼は曇るとる・春木一夫／パーマでデートしましょう・森口博夫

27——神戸っ子対談／小尾知愛・砂野耕一

31——経済ポケットジャーナル・KOBEオフィスレディ

32——技術ジャーナル／コンテナ・諸岡博雄

35——バイオニア神戸〈7〉／六甲市長グループ・岸百輝

41——東京通信

42——神戸のアーバンデザイン／水谷額介+

神戸のモダンリビング／チームUR

44——CINEMA ⑬／淀川長治

46——神戸遊藝誌⑬／バドミントン〈2〉・青木重雄

48——動物園飼育日記⑭／亀井一成

51——Let's Go American Foot Ball ⑦／米田満

54——Summer leisure in Suma

58——Kobe Look／福富芳美

64——特集①グラビヤ神戸開港百年祭開かる！

71——海飛ぶ円盤ホーパークラフト試乗記／鶴居玲

77——特集②開港百年祭成功した市民のための神戸カーニバル—座談会

87——男の気持⑥ タイプ／向井修二

88——れんきいマンガ⑭ベッコ／永井文明

90——神戸うまいもん巡礼⑬／赤尾兜子

92——淑女入門⑦ 悪友淑女・名村喜久江

95——INGコーナー

96——ポケットジャーナル

100——異人館物語第五話

耽溺の詩人モラエス／最終回 小山牧子

110——連載小説—兵庫の女〈十七回〉／武田繁太郎

117——対話12ヶ月

対話—安永稔和・カメラ—緒方しげを

121——銘店抄／ヒロタ・赤根和生

カメラ／米田定蔵・赤松慶三郎

レイアウト・カット／港野千穂

u*c*
coffee shop

この香り！

この味わい！

やっぱりUCコーヒね



u*c* 上島コーヒーショップ本店

さんちかメンズタウン TEL 39-5677

u*cc* 上島珈琲本社直営

神戸駅前 TEL 34-3606-9

新しい郷土意識を



金井元彦

〈兵庫県知事〉

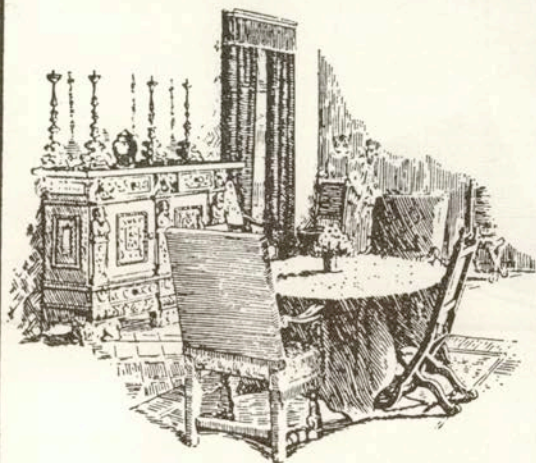
私は「神戸っ子」である。母校は大開小学校といま県立兵庫高校になっている神戸二中で、少年期を神戸で過ごした。東京の大学を出てからはずっと役人生活が続けて各地を移り住み、戦後しばらくの間東京で会社勤めをし、再び神戸に帰ってきたのは十二年前のことだ。子どものころ住んでいた兵庫駅のあたりはすっかり変わってしまったが、神戸二中には朝夕親しんだユーカリの大樹が残っていてほんとうに懐しい。

先日、神戸開港百年祭が行なわれて、私もその式典に参列したが、祝辞を述べていると胸の鼓動が高まるのをおさえられなくなる。また夜になって花電車などを見ると子どものように心がうきうきしてくるのである。私はそのとき、神戸の町に強い愛着を抱いている自分を見出した。

一般に、生まれ育った土地に対する情緒的な愛着は、地縁的な共同意識につらなっていて、その地域社会の一員としての自覚や責任感をはぐくんできた。しかし、日本の社会に残っていたこのような村落共同体の余韻は、近年の急激な都市化、工業化の波によってうすらぎ、土地に対する愛着をきわめて乏しいものにしてしまった。人口の出入りや移動の盛んな都市では、そこに住んでいるのは、仕事の都合や住宅事情など便宜的な理由によるものが多くなり、ともすればバラバラの長期滞在者の個人の集合体になりがちである。このため、住民意識とか自治意識といわれるものが、次第に稀薄になってきたようだ。

私は、地方政治の課題の一つがここにあると思う。県や市町は、積極的に住民の間の意思疎通をはかり、住まいのある地域社会に対する愛着を高めていかなければならない。ことしの兵庫県政百年の記念事業として、子ども病院やリハビリテーション施設、県立美術館などを建設することとしたのは、これらの人間尊重を象徴するモニュメントによって県民の人間愛をよみがえらせ、新しい郷土愛を育てたいと願っているからである。県政百年は、あまり派手なお祝い行事をしないで、兵庫県の新世紀を開く年にふさわしく、時代に即した県民意識を強く啓発する機会にしたいと思っている。

家具・室内装飾・工芸品



永田良介商店

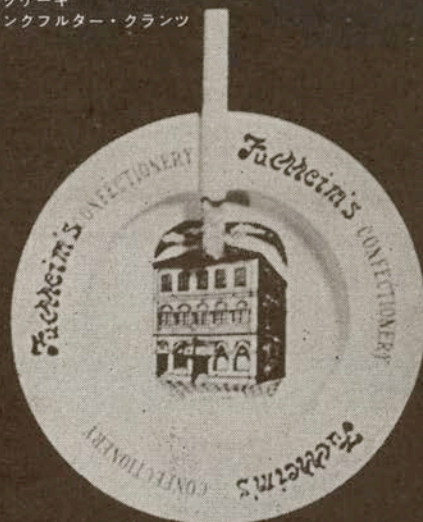
大丸前 TEL { ③9 3 7 3 7
3 7 3 9 }

東京白木屋 1 階 <211> 0511
内線 278



を
き
の
と
い
と
る
イ
ッ
の
統
味
風
子
菓

パウム・クーヘン
ビスケット
キングケーキ
フランクフルター・クランツ



ドイツ菓子

Faehheim's

ユーハイム

本 店 神戸三宮生田神社前
TEL (33) 1694・8064
三 宮 店 神戸大丸前市電筋
TEL (33) 2101 (39) 3808
さんちか店 三宮地下街スイーツタウン
TEL (39) 3 5 3 9

東京/銀座店・渋谷店 その他全国有名百貨店

□ 随想 □

ホロニがい

神戸の郷愁

原 清

え・津高和一



か

郷愁というのはおかしなものである。

今から数えると、もう三十年も昔のこと、私は当時、東洋のモナコといわれていたマカオを訪れた。船が着いたのは夕暮れ近かった。港を見下ろす丘の上のホテル。そのホテルのベランダで名物のブドウ酒を飲みはじめたとき、壮大な夕映えがはじまった。

果てしない南海の天空いっぱいがまぶしい金色に輝やき、その光を受けた海が金糸銀糸のつづれ織りのようにきらめく。その中に海岸線にせまった山影だけが黒く美しいシルエットを浮かび出させている……この夕映えの美しさは、私の心の奥深くまでしみ込んだ。異国の風景でありながら私には大変身近かな、そして今までどこかで必ら

ず見たことのある懐しい風景に思われてならなかった。

それもそのはず、このマカオの夕映え風景は、私が小さいときからよく眺めた神戸須磨浦の夕映え風景とすっかり同じだったからである。海にせまった鉄拐の峯のシルエットと瀬戸内の空と海に映える残照……私の幼い頭に刻み込まれていた神戸の土地への郷愁は異国の空で発芽したのだった。

そういえば、私のその後の海外旅行でも、特に印象深い風景は、みな神戸の街のどこかで見馴れ親しんでいた風景ばかりである。

フランスのマルセイユの船着き場では、メリケン波止場そっくりな岸壁と潮の香に郷愁をかきたてられ、モンマルトルの丘を見て大倉山を連想している自分を発見した。イギリスのマンチェスターでは東神戸の工場街を想い浮かべ、イタリヤのナポリ附近の山肌では有馬街道を、そしてアメリカのロサンゼルス背山マウント・ウィルソンでは六甲山と似た魅力に大きく心ひかれていた私であった。

郷愁とは、こんなものであろう。そして、私の郷愁を育ててくれた神戸の街。その神戸の街も戦前戦後を通じて、どんどん変わっていった。

明治末期、私の家は兵庫の佐比江町にあった。お隣りはタマゴ屋、すじ向いはセト貝の間屋。夕方、長いハシゴをかついだガス燈屋さんが走って来て外燈に灯を入れると青白い夜の世界がはじまり、近所のお医者さんの奥座敷では、ときどき私たち子供を集めて「日露戦争大勝利」の色つき幻

灯写真が写され大喝采だった。

また、お天気なら私は湊川公園まで母に連れて行かれて、ここで遊んだ。その行き帰り、新開地筋に立ちならぶ活動写真館の絵看板に心ひかれた幼き日の強烈な印象が、やがて私を映画ファンにそしてマスコミ人に、と追い込んでゆく運命をつくったのかも知れない。

大正時代に入って上筒井や脇之浜に移り住んだ。名物「筒井大根」の産地だけあって大根畑ばかりだった上筒井界限。海水浴には便利だったがその当時のわらべ唄で「大石、新在家なんて髪イワヤ（岩屋）頭しらみのワキノハマ」などと、土地柄いささかコンプレックスをうたわれた脇之浜。想えば懐しい。

しかし、かつて私が住んでいたいずれの街角も今はひろびろとした縦貫道路がぶち抜いて通り、自動車のラッシュが続いている。幼き夢をふくらませてくれた明治、大正時代の私の郷愁は、もう帰るべき家路を見失ってしまったようである。

私が通った雲中尋常高等小学校が、わが国最初の鉄筋コンクリート建築の小学校であり、全校生にゴム靴の制服ならぬ制靴をはかせた小学校であることを記憶している人もあまりないだろう。私が卒業した脇之浜小学校も幾度転、かつての校舎も引揚げ者寮となったまま、今は醜い残骸を国道筋にさらしている。この母校の前を通るたびに、私の胸はいつも強く痛むのである。郷愁とは所詮あまく、ほろにがいものである。

△朝日放送株式会社専務取締役▽

□ 随想 □

食べることと

茂本草介

え・津高和一

パリの雀にはほったに黒い丸がありませんと留学中のYさんが書いて来た。焼きトリにしたらどうだろうか、日本の雀とは味が違うかも知れない、と食いしんぼうの私はすぐにそんなことを考える。しかし餌が違えば味が違うのは本当であるう。

戦前知合だったインド人のGさんは宗教上の理由で牛肉を食わなかった。そこで、あなたはブタを食いなさるか？と、中学級のヘンな英語でたずねたら、日本のブタは魚のハラワタを食わされているので魚の匂いがする。だから魚を食いたくないった時にはブタを食べてもよろしい、と私の好意を傷つけないようにヘンな返事をした。

そのGさんは実際に魚が好きで、魚のなかでもウナギのカバヤキが大好きであった。カバヤキは三人前六切れを一度に持って来させて、フォークを六回使うと、もうそれで全部がなくなるのであるった。

いまの神戸のブタは魚の匂いなんかしない。M

とかRとか、私はよくトンカツを食べに行くが材料のブタは立派すぎるほど立派なブタそのものの味である。

終戦後間もなく、神戸駅の浜側で十日ばかりつづけて焼トリばかり食べたことがある。いまはないうが山側にYという劇場があって、私はそこで俳優をしていた。当時の日本人はみんな食いつめていたので自分で自分が不思議に思えるような環境におかれることがシバシバあったのである。素人の私がなぜ俳優をしていたのか。とにかく若手？の男優で相手女優は浅草出身のナントカいう名の豊満な美人で芝居も仲々上手であった。しかし私の方は日ダテ（日給）を貰うのが目当てなので、舞台もソワソワ、金を貰うとすぐにトリを食べにガードの下を走ったのである。そして、ひたすら焼きトリを食ったが、こんなうまい物は世の中にあるまいと思った。しかし、いまになってからその味を思い出すと、醤油にサッカリンを混ぜたようなタレの味だが、海の水をすくってスマシ汁を



め

作ったような時代だから、何もかも仕方がなかったのである。

ついこの間、古い店舗を明治村へ送ったOという新築の店で旨い牛肉の鉄板焼を食べたが、戦後二十幾年の歴史をかみしめるような味がした。実際、食べるものの復興は立派である。

留学中のYさんというのはNHKの「太閤記」の演出者だが、私が太閤記を書いて以来、いつも拙宅へ来ると神戸へビフテキを食べに出かけた。ガード沿いのHや生田筋のMのトルネードが好きで、こんな旨い牛肉は他の土地にはどこにもありませんといっていた。

西独から来た手紙に、ボンやベルリンのレストランのことが書いてある。従業員の訓練の行き届いていることは目を見張るばかりだ、というが味のことはあまり書いてない。それよりも下宿へ帰ってからたった一枚の塩コブを舌の上へせてそれを郷愁の良薬にする有様が丹念に書かれてある。ドイツの牛は何を食わされているのであろうか。日本の上等の肉牛はビールを飲ませたり、マッサージをしたり大変だそうだが、ドイツはビールの本場だから、あまり飲ませすぎてアル中になったのかも知れない。というのは私の想像だけの話だが、餌にも洗練された国民性があることだけはたしかである。

仙台から東北へかけてホヤという奇妙な貝がある。パイナップルにミミズの耳をつけたようなヘンな形で押さえると軟かい。なにを食って生きているのか、味は淡白で高貴な仙薬のような匂いもあって、まさに東北の神秘を思わせる。

戦前、私は大阪にいたが、おいしいパンがほしくなると阪急電車に乗って神戸へ買いに行ったことがときどきあった。そのころ、元町や海岸通りを歩くと、いかにも外人さんらしい外人が歩いたり、外人さんのような日本人が歩いていたものであった。外人が外人さんに見えるのはあたりまえとしても、神戸の日本人は男も女もなぜこのように洗練されているのであろうか、ひょっとするとパンばかり食べているからではあるまいかと思ったりした。

そのころの女友だちが靴や洋服地を買うのに、神戸までつき合わされたこともたびたびあった。

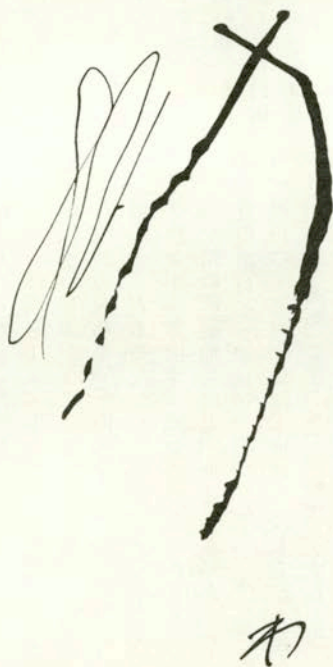
しかし、いまはどうであろうか。柳通りや地下街を歩いていても、大阪や姫路や明石の人も大体において区別がつかないようである。

戦前に比べて日本人全体がパンをたくさん食べるようになったせいかも知れない。それとも神戸百年の歴史が、もはや外型の域を脱して、一つの伝統として沈潜の時期に入ったのかも知れない。あるいは同時に神戸在住の外人が米を食いすぎて日本人に似てしまったのかも知れない。いずれにもせよエキゾチズムが稀薄になったからといって、神戸がどうなるものでもない。むしろ、共用の餌で一種の国際人を培養したくなるような、いまの国際状況の中では、神戸はやはり優秀な先驗性を持っているのである。神戸市はまず世界各国に神戸牛の餌の秘法を教えてやるべきである。

□随想□

……の
ある風景

中西武夫
え・津高和一



◇古本屋のある風景

旧制姫路高校在学中、帰省の途中いつも三宮で途中下車して、古本屋を一軒一軒あさって歩いた。ロゴスには、いい洋書が並んでいた。主人は変人だった。学生なんか相手にしてくれないように思われた。戦争で店がやけた時、彼が灰壺に虚脱状態で佇んでいた話を、ロゴスの娘さんからきかされた。宝塚出身でミス・ニッポン五位のTさんというグラマーの神戸娘が、このひとをつれて大阪テレビへよく訪ねてきた。ロゴスのおやじさんにこんな娘があるとすると、学生当時中年に見えたおやじさんは、案外、年をとっていなかったんだらうか。ふしぎに思う。

◇テープのある風景

一九三一年七月、祇園祭の日、ぼくは大学を出

てすぐ、シベリア経由でドイツへ留学した。神戸港から大阪商船の大連航路で発った。デッキのぼくの手のテープは、母、実家の弟、友人たち、実父の銀行関係の人たちの見送りのいる埠頭をつないでいた。晴々とした母の顔をみつめていた。心配だった。るす中の三年、母は京都の医師の離れ家でひとり住まいする。母のそばに、Yさんが和装でいた。松竹映画のニューフェイスで、ぼくの送別会の夜、中井正一、清水光、南部橋一郎の先輩たちと河原町を歩いていて紹介されたひとだ。「私も外国へ行きたい、きつと行きます」とYさんは日本から手紙をかいてきた。

三年たって郵船のハルナ丸で神戸へ帰ったとき母の眼の涙をみた。西村旅館で迎えの友達たちをもてなした和室と和食に、故国を感じるには、ぼ

くの心は若過ぎたようだ。

Yさんはぼくの不在中母を訪ずれ、三味線をひいたりして慰めてくれていたが、上京、女流飛行士の免状をとり、新橋の芸者になった。そして外務省の宴会に欠かさぬうれっ子になり、外交官と結婚し、外国に赴任し、終戦後離婚の手續きに関西へ来て再会した。食糧不足でぼくの妻は、むしろ彼女をもてなした。

◇モダン寺の地下室の風景

道化座の演出のためモダン寺に通った。国電のガード下に、ボン引きと夜の天使がはらんして、それをふりはらって寺へたどりつくのが苦勞だった。寺の地下室がけい古場で、雨の日は浸水して、渡り板をびよびよんととんで入る。たみみの部屋にみかんの空箱が、ぼくのための机である。白布が押しピンでとめてある。その机にサルトルをひらく。この寺の管理は、武周暢くんのお父さんである。俳優武周暢くんは、お父さんの代りに壇家でお経を上げるアルバイトをしている。時には僧衣姿である。ふところから、お布施のお菓子を取り出す。「先生、どうですか」とぼくの机にそなえてくれる。お菓子は気のせいか抹茶くさく、白布ばりのみかん箱机にびったり調和し、新劇無常の感があつた。そしてサルトルの実存主義劇「墓場なき死者」のけい古が、いんいんと進行する。時々パトカーのサイレンと女たちの悲鳴、男の怒声がかきこえてくることもあつた。

◇ヒロインのある風景

表から鍵のかかった錠のぶらさがった小屋がある。白痴のような男が「おらん、おらん」と首を

ふつてドアの前に立っている。

「墟つけ、はよあけんか」と頑丈な三人の男がいう。そのうしろに細いヒョロヒョロの男がいる。これがぼくである。

小屋は麻薬密売所であり、白痴のような男はドアマンという看視人であり、頑丈な三人はF署の麻薬係のベテラン刑事である。ぼくは取材で、同行している。

ドアマンは後退しながら、「おらへん」といいつつける。外から鍵をかけて、不在と見せている。偽装は、ベテランのでか長の眼と鼻をあさむくことはできない。

「おい、鍵出さんかい」「だれもおらしまへんて」「ようし、そんならドアたたきわるぞ」。拳でドンドン戸がたたかれ、ミシミシと板がなる。「あけんか。あける」。無言。

ドアマンは二メートル向うで、じっと見ている。頑丈な刑事の身体がドアに体当たりする。「どうぞ」小屋の中から人をくった声がする。

「鍵かかるとるやないか。何が、どうぞじゃ」ドアマンが歩き出す。地蔵のほこらがある。あつ、釜ヶ崎の麻薬地帯にも、地蔵さんがあつた。赤腹巻の組員がシケバリしていたと、ぼくは思う。神戸のドアマン氏は、地蔵のほこらから鍵をとり出す。「ああ、落ちとったわ」。デカ長の眼がにらんで、鍵をひったくる。

風のように小屋の中へ突入。われ目からの光線の外は、うすぐらい。異臭。

七輪の中でへ口はもやされている。証拠を消すのだ。仁王立のまま身体検査されている大男の片腕がなかった。

〈演出家〉